

あ と が き

「志布志」でまず何を思い浮かべるかは、当然ひとによって違う。年齢にもよる。しかし、太平洋につながった志布志湾をイメージする向きは少なくないのではないか。志布志の大きな特徴は海にある、と言ってもたぶん異論はないだろう。今回の調査研究で、志布志の街が海によって栄えてきたことを改めて確認したし、今後の発展も海に重点を置いて考えられていることも理解した。

志布志の海はかつて広範に埋められて工業の立地する場に変えられようとした。それを知っている世代は少しずつ少なくなっていく。工業化指向はなお根強いが、海はいま、船の出入りの道として地域活性化に生かされる方向にある。その目的のもと港湾機能の充実が進行中だ。ひと頃に比べると、志布志の海の景観は大きく変わった。

海を軽視した志布志は、たしかにありえないだろう。自然としての海も含めて、海を巧みに生かした志布志の発展を期待したい。

個人的な感想をいうと、志布志は伝統の街という印象がある。残念ながら歴史が色濃く残存しているとは言い難いが、伝統を彷彿とさせる事物はそこかしこに存在する。そのひとつに民俗芸能が挙げられよう。農耕儀礼の祭祀としてつとに知られる田之浦山宮神社、安楽神社の祭りはその代表格であろう。2月初めにはダゴ祭りが執り行われた。いつぞやは神舞を鑑賞して感動したものだ。

これらを脈々として伝承している人たちがいる。それが志布志でもある。そう思っている。

調査研究には多くの方々のご協力をいただいた。なかでも町役場の皆さんには大変お世話になった。本来のお仕事の時間を割いて私たちの質問にていねいに答えてくださり、また現場にご案内いただいた。必要な資料も提供していただいた。心からお礼を申し上げる。

調査研究はそれなりに努力はしたつもりだが、けっして十分なものとはいえない。この報告書に収めた報告も限られたものになった。内容について、ご批判やご意見が多々あろうかと思う。お聞かせいただければ、謙虚に耳を傾けるつもりだ。志布志からのご批判をぜひ聞きたいと思っている。

2000年3月

高 嶺 欽 一

執筆者紹介（執筆順）

小 森 治 夫	鹿児島県立短期大学商経学科	助教授	日本経済論
朝 日 吉太郎	鹿児島県立短期大学商経学科	助教授	経営学
高 嶺 欽 一	鹿児島県立短期大学商経学科	教授	社会政策
西 村 富 明	鹿児島県立短期大学商経学科	講師	地域経済論
小 住 フミ子	鹿児島県立短期大学生活科学科	教授	調理学, 栄養学各論実習
上 村 和 子	同	助手	調理学, 栄養学各論実習

鹿児島県立短期大学地域研究所「研究年報」第31号

2000年3月29日 印刷

2000年3月31日 発行

発行者 鹿児島県立短期大学地域研究所
鹿児島市下伊敷1-52-1
☎099-220-1111（代表）

編集者 高 嶺 欽 一

印刷 黒木印刷株式会社
鹿児島市新屋敷町11-14 ☎099-239-2257
